鞠智城跡の調査と整備

大田幸博

一　概要

熊本県の鞠智城は、大和朝廷によって西日本地方に築造された朝鮮式山城の一つである。しかし、『日本書紀』に「天智四（六六五）年の築城」と明記された北九州の大野城（福岡県）や基肄城（佐賀県）と異なり、築城時期に関する記載が無い。鞠智城の場合は、『続日本紀』の文武二（六九八）年五月の条を待たねばならない。「大宰府をして、大野・基肄・鞠智の三城を修理した」との記事が初見である。その後、鞠智城は一六〇年間の空白期間を経て、『文徳天皇実録』の天安二年（八五八）二月と六月の条に、城内で発生した怪奇現象を伝える三回の記事があり、最後は、『日本三代実録』の元慶三年（八七九）三月の条をもって国の歴史書から姿を消している。従って、文献上で明らかな城の存続期間は一八一

図１　発表中の大田幸博氏

年間である。一方で、大野城と基肄城と同時期に修理されているので、築城時期も、この二城と同じ時期とする見方が有力である。実際、これまでの発掘調査の結果と照合しても妥当な線である。

城の性格は、創建期の7世紀後半と、終末期の九世紀後半とでは、明らかに違いがあろう。実際、前者は、東アジアの国際情勢が極度に緊張した状態での築造であり、国家防衛網の一翼を担うものであった。後者は、それから長い年月が経った後であるが、廃城になっていないので、おのずと性格の変化が考えられる。

鞠智城跡は、県北の山鹿市菊鹿町と菊池市木野堀切に所在しており、楕円形状の丘陵地に築造されている。城域面積は、真の城域が五五ha、外縁地区を含めると一二〇haの広さとなる。真の城域を東京ドームの大きさに換算すると一二基分の広さである。縁部は、土塁線と崖線に囲繞されており、全周すると三・五kmになる。菊池川

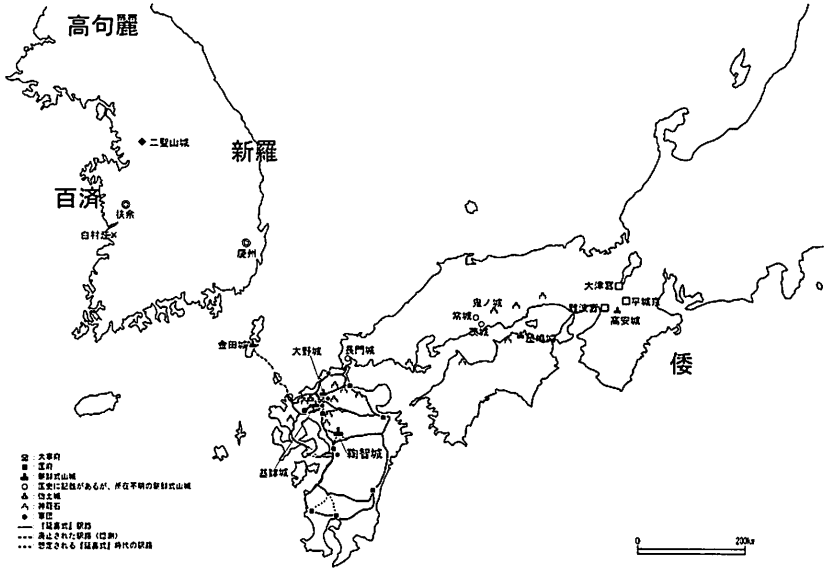

図2　7世紀後半の東アジアと鞠智城

（一級河川）流域の北方丘陵地に位置しており、中心標高一四五m、肥沃な菊池平野とは、一〇〇mの比高差となる。数多くの遺構は、山鹿市菊鹿町の米原台地を中心に展開しており、一部は、菊池市木野の掘切まで広がっている。行政の面積割合は、山鹿市が九割を占め、菊池市は一割に留まる。但し、正門と見なされる堀切門跡の門礎石は、菊池市側に残っているので、鞠智城は、菊池市側の南を向いている事が分かる。これは、当時、大宰府からの官道が菊池市の隈府を通ってからである。

発掘調査は、熊本県が一九六七（昭和四二）年から実施しており、今年度で31次を数える。一方で、一九九四年からは、調査成果を元に整備事業が進み、二〇〇四年二月に国指定史跡になった。

図3　鞠智城城域図

一九九三年四月に開館したガイダンス施設「温故創生館」を軸に、八角形鼓楼・米倉・兵舎・板倉の古代建物が復元され、この八年間で、優に１００万人を越える入館者があった。今日では、古代史を学べる野外学習の場として定着している。県外及び韓国からの見学者も多い。

二　発掘調査の経緯と成果

発掘調査は、一九六七年に始まった。当時、米原台地は、一面の桑畑とさつまいも畑であったが、この年、地元の手によって大がかりな水田化工事が行われた。地下ボーリングによって水源が確保され、一帯が開田された。この際、数多くの大型礎石が発見され、鞠智城の場所は、米原台地に間違い無いとの確証が得られた。同時期、礎石があった長者山の西側地区が地下げされて、牛小屋が建てられる出来事があった。そこで、急遽、熊本県教育委員会を母体として、九州の考古学者を中心とした発掘調査団が組織されて、緊急調査が行われた。一～四次調査のことで、鞠智城調査の草分け時期である。これを契機に、発掘調査は六次調査以降、県教委を調査主体として今日まで継続して行われてきた。なお、五次調査に限っては、旧菊鹿町が発掘調査を実施している。城内を貫く町道の拡幅工事に伴う事前調査で、鞠智城で初めての、百済系軒丸文様瓦が出土した。

一二次調査（一九九〇年）は、佐賀県から吉野ヶ里遺跡が発見された年である。熊本県でも、これまでの文化庁国庫補助事業に加えて、県自主事業として調査費の大幅な上乗せを行った。吉野ヶ里遺跡を意識したものであったが、「鞠智城を最重要遺跡と見なす」県の姿勢が示された事を意味した。その結果、調査面積も大幅に拡大し、一三次調査では、構造の異なる二棟の八角形建物跡を検出するに

至った。国内の古代山城では、初めての発見であった。この時期、韓国の京畿道地方の二聖山城跡からも、類似の八角形建物跡が検出されたとの情報を得て、現地視察のために調査員が渡韓した。調査を行った漢陽大学の教授に面会して、学生の案内で城地を視察した。八角形建物跡の発見は、古代における日本と朝鮮半島との文化交流の証でもあり、鞠智城にとって画期的な年になった。

一四次調査では、鞠智城の終末期（九世紀後半）にあたる礎石建物跡を確認した。国の歴史書に記載された平安時代の鞠智城を考古学の立場から実証した事になる。15次調査からは、県自主事業が終了して、再び、文化庁国庫補助事業のみの発掘調査になった。町道から東上の上原地区を調査して、この地区が建物遺構の空白地帯である事を明らかにした。練兵場的な区域ではないかと解釈している。一六次調査では、深迫門跡の谷部から版築土塁を検出した。細層の版築土を何十枚

図4　鞠智城跡

にも積み上げた本格的な造りであった。

一七～一九次調査（一九九五～一九九七年）では、長者原地区から一七棟分の建物跡（五〇～六六号）を検出した。一方、一九次調査では、長者原地区の谷部から貯水池跡を発見した。総面積五三〇〇㎡に及び、谷部の緩傾斜地を利用したものであった。谷部の貯水池跡から文字の判読出来る木簡や木製の農具も出土した。木簡には、「秦人忍□斗」との墨書があり、鞠智城の近くに渡来人の居住が推定される遺物でもあった。さらに二〇次調査では、貯水池跡の一部が、貯木場にも使用された事が判明した。池跡から数多くの建築材が見つかった。池に備蓄されたもので加工材が多かった。「貯水池跡・貯木場跡・木簡」は、八角形建物跡と同じく、国内の古代山城として初の発見であった。続いて、二二次調査では、貯水池跡の湧水地点から、井戸枠に該当する大型の木組み遺構が発見され

図５　貯水池跡の貯木場跡

た。一方で、堀切門跡からは、門礎石の原位置が確定された。凝灰岩の谷部を加工した登城道の一部からであった。

二三～二五次調査（二〇〇一～二〇〇三年）では、貯水池跡の継続調査に加えて新たに土塁線の調査を行った。二三次調査では、崖線の上に築かれた南側土塁線が、版築土塁である事が分かった。個々の版築土は厚めで、深迫門のそれと違いがあった。長者山の西地区からは、四棟の掘立柱建物跡（六九～七二号）を検出した。牛小屋跡の削平地で、旧地形には、礎石が並んでいた所である。礎石建物跡の下層遺構として注目された。二五次調査では、西側土塁の一部も版築土塁であることが判明した。花崗岩のばい乱土を叩き締めて積み上げたものであった。

二六・二七次調査（二〇〇四～二〇〇五年）では、池ノ門跡から、谷間を仕切る石塁が検出された。全壊に近い状態であったが、基礎部に通水溝と導水溝が残っていた。二八次調査は、深迫門跡を再調査した。一六次調査で、版築土塁が検出された調査区である。二九次調査では、南側土塁線や東端平坦部からも版築土を検出した。さらに、貯水池跡の池尻部では、石積みを伴う堰堤を把握した。三〇次調査（二〇〇八年）では、池岸近くから、百済系菩薩立像が出土する画期的な発見があった。

三　鞠智城の整備

発掘調査では、二〇〇九年で三一次を数える。熊本県では、この鞠智城跡の保存と活用を図るために、一九九四年から四ヵ年計画で城跡地の用地所得を行った。城跡の総面積五五haの内、米原集落・墓地・営農地の上原地区を除いた四三・五haを対象とした。遺構の空白地帯と判明した上原地区

では、県農政部が畑地を施策開田して、地権者に便宜を計る方策を取った。これが、用地購入の決め手になった。

整備事業は、一九九六年から開始した、遺構全体を、一・五～二・〇ｍの客土で覆った後、整地面に四棟の復元建物を建設した。八角形建物跡については、鞠智城跡保存整備検討委員会で多くの議論を重ねたが、最終的に中国や朝鮮半島にルーツを持つ「鼓楼」と推論した。鼓楼につては、六国史の『日本文徳天皇実録』に「兵庫の鼓」との記述がある。芯柱の長さ15.3ｍ、使用されたのは、地元産の樹齢一八〇年の檜材であった。宝珠を含んだ総高は一五・三ｍ、三層造りの瓦葺き屋根は、総重量七七ｔにもなる。最上階には、連絡用の太鼓を置いた。この八角形建物跡の復元に際しては、鞠智城跡調査保存整備検討委員会からの強い勧めがあって、遺構保存のために検出場所から、やや北側にずらしている。

二〇号礎石建物跡は、総柱の構造であった事と炭化米が出土した事から、米倉として復元された。高床式で、瓦葺きの校倉造り建物である。屋根瓦の重量は三二ｔ。側柱の長方形・掘立柱建物跡は、兵舎と推定された。板葺き屋根で、つり上げ式の窓が特徴である。内部を縦断する通路を境として、両側に兵士のベッドが並び、収容人員は五〇名程度と推定される。発掘調査では、同じ構造の建物跡が二棟並んで見つかった。鞠智城には、ある時期、少なくとも二棟の兵舎に、一〇〇名程の兵士が駐屯していた事が分かる。総柱の掘立柱建物跡は瓦の出土が無く、兵舎から近距離にあるために、茅葺き屋根の板倉として復元された。武具などを保管したと思われる。周囲に掘立柱建物跡の遺構明示がある。

長者山には、検出遺構を参考にして、木造の休憩所が建設された。宮野礎石建物跡の近くから見つかった寝殿風建物跡（一一号・一二号）をモデルとした施設である。礎石と掘立柱の併用建物で、正方形状の大型礎石建物の周りを、掘立柱の回廊が巡る構造である。なお、復元建物と区別するために、北側を除く三面の壁がガラス張りになっている。

鞠智城は、二〇〇四年二月二七日付けで、国指定史跡になった。前述のように、発掘調査は三一次を数え、整備事業も一六年目に入った。現在も、園路造り等を中心とする整備事業が進行中である。熊本県では、二〇〇六年から国営公園化を目指して、県民一丸となって運動を展開している。